

道教概観

小柳 司 氣 太

自分の祖父は一體神道を信じましたのでありまして、神官の一人で、私も幼少の自分は常に祖父に連れられて自ら神社に奉仕したこともありまして、常に神道といふものに對しては甚だ興味を有つて居ります次第であります。何分其方に付きまして十分に研究を致したこともありません。神道に關する直接の御話は皆様方の前に申上げるとは聊か困難であります。併ながら日本の神道といふものは定義も種々要りませうけれども、今日の所謂神道といふやうなものゝ土臺を据へました賀茂真淵先生でありますとか、或は本居乃至平田兩大人の如き人の所説を今日讀んで見ますといふと、私共の立場から見ますれば自ら又多少の意見又批評も無いではありません。此間もそれに付きまして、彼の賀茂真淵先生の國意考といふ書物を讀んで見ました、ところがそれを又論駁したものには野村公臺の讀賀茂真淵國意考といふ本が漢文で出て居ります。更に國文にあつては三芳野城長と申します人の——國意考辨妄といふ本があります。此二つの本は前の賀茂真淵の國意考を論駁したものであります。それから又更に之を反駁したものは源稻彦の著はしました辨讀國意考といふ書物がござります。是等の國意考

なり辨讀國意考なりは皆主として所謂國學者の立場からして國體の貴きことを知らしめ、同時に當時瀾
 蔓して居つた所の漢學の勢力を打破り支那崇拜の迷夢を覺醒しやうといふ積りで斯ういふ著述が出来た
 ものと思はれます、其他例へば本居先生の直日靈ナホヒノタマまた之を反駁するが爲に市川匡が著はしました萬我能
 比禮ヒレといふ本があります、その又萬我能比禮を本居先生が論駁する爲に葛花クワナといふ本がありますし、其
 他平田篤胤翁の書されました所のものにも随分漢學に對する非難攻撃といふものが盛に出て居ります。
 そこで是等の所説の上に現はれたる所の漢學に對する非難、批評といふものは種々多岐多端に亘りまし
 て、之を一概に論ずることは頗る困難でありますけれども、要するに詰り其第一の理由といふものは
 我國の神といふものと、それから漢籍即ち漢學の上に稱する所の神道といふものとは大變違ふといふこ
 とが一つの理由になつて居ります、是は其當時太宰春臺など、いふ人が、神道といふことが易經にありま
 す。即易の觀卦の彖傳に觀天之神道而四時不忒、聖人以神道設教而天下服矣と載つてをります。
 此易の神道といふことを持つて來て、我國の神道も矢張り要するに支那の所謂神道に外ならないもので
 ある、詰り國學者が漢學者のものを捕へ來て神道といふ名を設けたものであるといふやうなことを論じ
 たものと見える、是に對して國學者の説く所を見ますると先づ神道といふものは決してさういふもので
 はない。固より我國典に依つて見ると、神道といふ文字が二箇所に國典に出て居る。其二箇所は何であ
 るかといふと、一箇所は日本書紀にある。日本書記の用明天皇様の所に於て、天皇信佛法尊神道と

いふことが一つある。それから同じく孝徳天皇様の所に惟神者隨_三神道_二亦自有_三神道_二也といふ文章が見えて居るところで今の用明天皇様の佛道に對して神道と仰せられたのは、それは單純な祭儀所謂お祭のことであつて、國學者の所謂神道といふものとは多少意味が違ふ、國學者の所謂神道「神ながらの道」なるものは孝徳天皇の所に出て居るのがそれで、所謂惟神の道と稱するものである。此惟神の道の神道といふものは易などにある所の聖人以神道設教といふものとは全く違つて居るものであるのみならず、支那の神は宇宙の空理を指したるまでにして、我國の神とも本來違つた者である。それからして第二の點に於て天命といふことに付いて論じて居る。儒教學者は動もすると、天命といふものは知り難いものである。人間の禍福吉凶などいふものは分らないものである、隨て死生有命富貴在天など、言つて誤魔化して居るけれども、それは一體さういふものではない。畢竟我國の古典を知らない所からそんなことを言つたのである。即善神惡神ともども事を行ひ給ふ結果であることを知らないことから徒らにさかしら言を述べて居る。それからして第三の點に至つて人間の慾、人慾といふものを儒教學者は大變卑しめるけれども、是は矢張り人慾の來るべき理由があつて、自然に人間が人慾を有つて生れて居るのであるから、人慾も一つの眞理であるといふやうな事を先づ述べて居ります。

併ながら國學者の左様な批評に對しては種々論すべき機會もありますからして只今は略しまして、直接に茲に御話すべき事は曩に申上げた所謂「神ながらの道」そのものが所謂老子の思想に大變類似して

居るといふことである。既に國意考の中にもどうも漢土の學者といふものは多く理窟にかためて居る。所謂漢意カクコといふもので何もかも取括りて議論する。併ながら人間の小さい見識から考へ出したことであつて決して宇宙の眞理を見究めることが出来ない事であるにも拘らず、彼等はそれを唯一の頼みとしておる、故に論ずる所皆矛盾して間違つて居る。併ながら此老子といふ人の述べた説は頗る之と相反對したる傾向を持つて居る者である。其所謂自然の道と吾々の「神ながらの道」とは大に近い、儒教の道よりも大に神道に類似して居るといふやうな言葉を此國意考の中に述べて居ります。隨て此國意考を論駁したも即野村公臺の讀國意考に於ても、如何にも國意考を讀んで見るといふと、我國上古淳樸の政治を以て老子の自然の道と相似たものであるといふ風に論じて居ると述べて居ります、かくの如く、神道と老子の道とが相似て居るといふことを漢學者がいろいろ論難したものでありますから、隨て國學者の方でも亦是に對して辯じて居る。例へば宣長の説に依つて見ましても、我道は成程老子の道と似て居る。なるほど其老子には自然といふことを備へて居るけれども、老子の自然は偽りの自然で我惟神の自然とは大に違ふ、何故かといふと、一體老子は理を主とし智を主とする世風に反對してあゝいふ説を述べたのである。其反對する事自身が既に不自然である。若し自然であるならばそんな事を言はないが寧ろ自然である。といふ意味で此辨明をして居ります。(葛の花下卷を見よ)そこで先づ是等の事に付いて段々論じて見ますといふと、私共の考から見ますといふと、今の賀茂眞淵先生以下の唱へた所

を儒教の學問と較べて見ますといふと、賀茂眞淵先生等の駁撃したのは主として同なしく儒教と申しましても宋學に對する駁撃が主でありまして、古學即ち原始的の儒教に對する方では此の駁撃も格別大した違ひはないか知らぬ或は或點に於て原始的儒教は國學者の所謂神道と共通の説がある者であると吾々は考へる。例とへば曩に御話しました天理人慾の區別などでもさうであります。成程宋の時代、朱子などになりますと、天理と人慾とは絶對的區別のあるものであるとやかましく論じて倫理上嚴肅主義を執りましたのであります。けれども原始的の儒教から申しますればそれ程人慾は何も卑んでない、人情は聖人の重んじ給ふた所である。聖人が教を遺したのは人情に依つて述べたのであるといふ工合に説いてある。朱子の時代も胡五峯などといふ學者がありますが、此學者は天理人慾は本體は同じであるが現はれ方が違ふだけであると、格別朱子派の如く嚴重に區別して居ない。それから又神に對する考などでも、尙は此宋の時代に於きまして、張橫渠などは鬼神者二氣之良能也と言つて居りまして、宇宙をバンセチック……汎神論的に見て鬼神を認めて居る。別に人格的の鬼神があるといふことを述べてない、宇宙に遍滿せる一つの陰陽の働が取りも直さず鬼神であるといふ説であります。けれども原始的の儒教に於ては、矢張り孔子などは鬼神を信じて居られたやうに見える、孔子は固より宗教家ではありませぬし寧ろ宗教に對してはインデペンダントの位置に居つたやうであります。併ながら無神論者ぢやないと私共は信ずる、此故に平田篤胤の鬼神新論を見ましても後世の學者

は孔子の眞意を知らずして、宋學などになると理屈詰めに鬼神を非難するが、儒教の本を開いた孔子はさうではなかつたといふことを論じて居ります。斯ういふ譯で國學者の漢學に對する論難は多く宋學に對する方でありまして、彼の古學に對する方に於てはそれ程嚴しく區別が附け得るといふ譯ぢやないやうに考へる。

さういふ風に種々ありますが、其中に就きまして今晚私の、種々國學者が漢學に對して非難いたしましたに付いて列擧しました箇條書きの中で、主として御話したい事は所謂老子の話即ち道教といふことに付いての話であります。固より今日の道教といふものは老子と大に違つて居ります。併ながら兎に角老子が道教の開山であると今日は申して居りますからして、今茲に老子の道と神道といふものゝ比較が出て居りますからして、それに因んで後世に起つた所の道教の話を致さうと思ふのであります。何故ならば我國には老子の學者は餘り餘計ないやうに考へる、無論老子の本を註釋したり、莊子の本を註釋した人は澤山ありますが、老莊の説を敷衍した人は餘り餘計はないやうに考へる。彼の先哲叢談などを見ましても、確か徂徠先生の弟子で金蘭齋などは老子の學者として傳つて居ります、又廣瀬淡窓の析玄といふ本がありまして、老子の説を述べてありますが、概していふと之を信奉し又哲理的に述べた者は餘りない。それが測らずも神道の學者の中に其思想が現はれ出でたといふことは是亦不思議な事と言はなければなりません。

そこで其老子を土臺にしました道教に付いて御話を致すことであります。先づそれに對して支那に於て一體宗教といふものがあつたか、又支那の古代の宗教といふものはどういふものであるかといふやうなことを多少見究める必要があります。何故かならば老子の教が支那古代の宗教に通つて居りますから、其淵源を究めなければならぬ事であります。そこで支那古代の宗教を論ずるには勢ひ先づ若し材料がありますれば支那の神話に付いて立論する方が餘程便利でありますけれども、奈何せむ支那には我日本の國の紀記二典の如きものであるとか、或は其他西洋各國にあるやうなミソロジーといふものが無い、無論後世に於きましては種々な傳説があります。例へば太古に於て盤古といふ神が居つて、其神が天地山川日月などを皆生じたものであるとか、或は天皇氏、地皇氏、人皇氏があるとか、手近かな所では十八史略の始めなどにも出て居ります。それ等を取纏めて清朝の馬縉が著はせる釋史といふ本の始まりに載せて居りますけれども、それは多く後世の假托でありまして、何等信すべき理由が無い。例へば今申しました如く盤古氏といふ者がありますが、此盤古氏といふ名目は決して古代からあつたのではありませぬので、要するに後世に作つたものであります。太平御覽といふ本に韓詩外傳を引いて斯ういふやうな事が出て居ります。人間が死ぬといふと精神は天に歸し、内體は土になる。それから血は水となり其聲は雷に歸する。それから日は日月に歸し骨は木に歸すると載せて居ります。但し今日の韓詩外傳には此文がないやうであります。此の如く太平御覽にはただひろく人が死ぬとかくなるべきもの

であると述べただけであるのに、後世に至りては此所へ盤古氏といふ人物の實在を假定して之を其のままに宛てはめ盤古氏の目が今日の日月となつた、盤古氏の血が今日の水となつたといふやうな風に盤古氏なるものを設けて假托して作つてある。といふやうな譯で其の他種々の古代の神話傳説は今日一つも殘つて居ないと言つて宜い、たとへ有つても後世の信すべからざるものであります彼の孔子が書經を編纂せられました時、堯舜から以來を採つて堯舜より前の傳説は悉く荒唐不稽なりとして棄てられてしまつた。併しながら今日から考へて見ると人文史の研究などに付いては寧ろさういふ古代の傳説が遺つて居つた方が大に都合が宜いことと思ひますが、それは今更如何ともし難い事でありますそこでありますから支那の古代を神話から説くといふことは全く駄目であります。それで更にそれならば宗教といふものはどういふ風に見るかといふと、宗教は何れの國を問はずあるものでありますから、固より支那に於ても宗教は必ずあつたことである。支那國家の組織といふものは詰り家族制度であります。家族制度は要するに祖先崇拜である、祖先崇拜といふことは矢張り宗教と非常に關係のあることでありまして、靈魂が不滅であるといふことを信じなければ祖先崇拜も起らず家族制度も自然發達しないことだらうと思ひます。即ち祖先崇拜といふことが支那に於て昔からあつた。又自然を崇拜したといふことも經史に於て古代から明かに見えて居ります。山川國土の神を信するといふやうなことが見えて居ります。そこでさういふ譯だから支那では古代より宗教があつて従つて宗教的の儀式を非常に尊ぶ、支

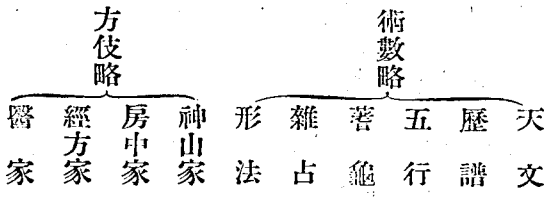
那には御承知の通り禮樂を非常に重んじます。其禮といふ文字が既に宗教的の意味を有つて居ります。今の禮といふものは宗教から起つて來たものと見える、何故かならば諸君も御承知の通り禮の字は普通斯う禮と書きますが、示篇は神或は祭に關係する文字に附いて居ります、詰り上の二字は天を示したもので、下の小は日月星を示したものである。豊はどうかといふと、祭の道具であります。上の曲といふやうな字は物を入れる函を示したものである。今日いふ」であります、下の豆は、今吾々は、「まめ」といひますが、是で豆は祭器の形であります。陳俎豆設禮容といふ其の俎豆の實形を寫したものであります。さうしますと今日普通いふ禮樂とか禮といふものの起原は、是は詰り宗教、所謂祭祀に關係を有つて居つたものでありまして、而して禮は五つに分れまして、吉凶軍賓嘉とありますが、其中で鬼神を祭る禮即吉禮を最も大切にします。それが家族制度と結び付いて居る。例へば男子が元服をします時に於ては矢張り祖先の廟門の内に元服の儀式を行ふとか、或は婚禮をすれば必ず之を祖先の神に告げるとかいふ風に家族制度と餘程厳しく結び附けられてあります。隨て左傳にも國之大事在祀典、戎となつて居ります。祀といふのは祭りのことで戎は戰さである。祭りと戰さとは一國の大事であると左傳成公の所に見えて居る。さういふ風に社會の秩序を立てる禮といふものが宗教的に關係ある語源を有つて居るといふことであるならば當時如何に宗教の勢力が盛であつたかといふことは言はずして分つて居ることゝ思ひます。彼の周禮を見ますといふと、矢張り周禮の六官の一つに於て太宗伯といふ者があります。是

も矢張り禮を司る役人であります。一體支那には、昔の官制を見ますといふと、天の事を司る官とそれから人事を司る官と兩方備へてある、般の時代などを見ましても天の事即ち祭祀の事を司る役人と、人間の事詰り一般の行政を司る役人と斯う二つを朝廷に設けられて居つたことゝ見えます。又周になりましても、周禮の中に太宗伯などを設けて鬼神の祭祀の事を司らしめたといふことは其事から來たものと思ひます、さういふ譯でありますから我國の昔の政治が祭政一致であるといふことを申しますけれども矢張り此支那の古代の政治は一種の祭政一致で、天皇、主權といふものが同時に神を祭る所の長であることである。支那では最も神を祭るに神の中では天を尊びますから、天を祭る特權を有つて居る者は王者、一國の帝王だけであつて其外の者は祭ることは出來ぬ。王者は政治の實權を有つて居るが如くに宗教上に於ても最も優勝な勢力を有つて居つたものであります。それといふも王者は天の命を受けて天位に即くといふ所から起つたものでありませう、又君主が宗教上の實權を有つて居るといふことは例へば靈といふ字です、此の靈といふ字。又靈とも書きます説文に靈は巫で玉を捧げて神に奉事する者となつて居ります。されば古代に玉を捧げて神を祭つたのでありませうが、周禮などを見ますと、諸侯が身分に應じまして、それ〴〵玉を以て天子に見ゆるといふことが出て居りますから、さういふ所を見ましても餘程君主が一方に於ては政治宗教等の實權を有つて居つたものであるといふことが分るのであります。そこで周禮に於て太宗伯などを見まして、どういふ神を祭つてあるかといふと、所謂天の神、

地の神、人の神即ち天神、地祇、人鬼といふ三種に區別せられます、其天神の中に種々小さいものがある。例へば日月星であるとか、或は地に附屬して山川の神であるとか、或は道路の神であるとか、或は其他の地上にある種々な神様がそれに附いて居る。それから人の死した靈、所謂人鬼、斯ういふ風に支那の鬼神は天神、地祇、人鬼の外に出ませぬ。それに付いて祭の方法などが規定せられて居る。また太宗伯の配下には之に關係する諸種の役人が居ります大卜師龜人占人筮人などと筮の事を司り、占夢は夢の吉凶を判斷し眡禮は日光の模様を見て妖祥を辨じ大祝小祝司巫等は祭祀の事を辨理し馮相氏保章氏等は日月星辰の運行又變動を觀察することをつかさどつて居ります。そこで此等の宗教的思想といふものが段々勢力を占めて來て春秋時代などに於ては盛に宗教的勢力といふものが政治上にまで及んで居る一國の大事を決する時に於ては占を立てて見る。といふやうな事は春秋時代に盛に行はれて居る。孔子が彼の不語怪力亂神といふやうなことを述べたのは、幾分かそれ等の迷信的の時勢に反動して起つて來たものではあるまいかと斯う思ひます。

そこでそれ等の宗教的の考が段々數百年を經過して一つの宗教から種々の學問が分れたのであります支那古代の學問思想は手近な所は漢書の藝文志に現はれて居ります。之を讀んで見ますと、大部分宗教に關係し、神といふ事に關係して居らないものは無い位であります、大部分皆それに關係して居る。之を御話して見ますと、藝文志は御承知の通り漢代の帝室にあつた書物を總て分類したものであります

から、詰りそれを見れば當時どんな思想が行はれて居つたかといふことが分ります。其の分類の中に諸子略といふ者がある。此諸子略の中に陰陽家といふ者があります、それから兵書略といふものがあります。此兵書略も段々性質を考へますと、矢張り陰陽鬼神の説に關係して居る。それから術數略といふのがあります。此の術數略がどういふ風に分れて居るかといふと、斯ういふ風に分れて居ります。



今此の表を見ました前に申した如く諸子略の中の陰陽家及び兵書略を調べて見ますと多く宗教に關係し

た所から起つて來た學問であります。天文と申しても決して今日の天文とは大に違つて日蝕、月蝕に依つて吉凶を見るとか、或は雲の行き鹽梅を見て禍福を豫言するといふ一種のアストロロジといふことでもあります。歴譜、五行なども皆さういふ風であります。著龜といふものは龜の甲を取つて占ふ。雜占もさうであります。形法は今日の家相、人相などが皆是から發達した學問であります。それから醫家經方家、房中家、神仙家、是等は大抵陰陽五行の説が土臺となつて發達したものであります。さういふ所から見ると殆んど支那の古代の學問は悉く其當時の宗教が本となつてから種々のものが發達したといつても宜い位であります。詰り大部分宗教と關係して居ります。

此中に特別に道家と關係のあるのは醫者であります。醫者が昔は宗教と餘程關係があつた。醫といふ字は醫とも書いて居ります。普通は下へ酉を書くのでありますが、巫といふ字も書きます。或は醫術家が宗教家であり、或は神を祭る人が醫者と一緒になつて居つたといふ證據である。さて此醫術といふものは要するに身體の健康を保つとか、長生をしようとかがいふことであります。翻つて老子の書物を見ますといふと、さういふやうな風に取れる所が随分澤山あります。例へば老子の第十章に抱一と專氣といふことがあります。文は其通りではありませぬが、肝要の言葉だけを抄書きして見ますとさうある、要するに老子の意は精神を守つて外界から引かれぬやうにするといふことである、それから五十二章及び五十六章に塞兌閉門とある、口を塞ぎて目を閉づといふ意味であります。第三章に虛心其心實其腹といふこ

とがあります。第六章に谷神といふ言葉があります。それから玄牝といふ言葉がある。是は老子は道は名くべからずと申しましたが、人に知らしむるやうに谷神とか玄牝とかいふ文字を當嵌めた。それから吾々の言ふ攝生といふ文字が老子の五十章に出て居ります。其他随分斯ういふ方の思想を述べたものが老子の中には所々に見えて居ります。老子其人は別に長生をして長生不死の術を講ずるといふ精神で述べたのではないですけれども、解釋のしやうに依つてはさうにも取れる所が随分ある。隨て老子の河上公の註：：老子には色々註がありますけれども最も神仙家の術を述べた河上公の註を見ますと、さういふ事を述べて居ります。玄牝といふのは即ち肉體の鼻のことである。谷神は口のことである。人間の身體に當嵌めて論じてある。此思想は莊子にもあります即熊經鳥申と申して、體操のやうなことで、又吐納故新といふて、深呼吸のやうなやりかたのあることを論じて居ります。さういふ風に老子莊子を見ると、長生長壽といふやうな衛生の事に力を用ゐて居る所が随分見える。それから老子は別に人性を達觀してさうして自分の精神を莊子の所謂無何有之郷に遊ばしめるといふやうなことで自分の理想を神仙に託して述べて居る。例へば莊子の中に彼の姑射の神人を以て自分の理想を寓するとか、或は列子の中に黃帝の事を述べて自分の理想を寓するとかいふやうな事を述べてある。けれ共老莊自身の意味では神があつて宇宙を支配するといふやうな事ではない。唯僅かに莊子の中に若し人間が惡るい事を爲すといふと、人は知らぬでも鬼神が之れを懲罰するといふことを述べてあるやうに思ひます。其他鬼神といふやうなこ

とに付いては直接に述べてはないことで神仙と申しても唯自分の理想を寓したただけであつて果してさういふ長生不死の仙人があり自分がそれを希望して居るといふやうなことは別に見えませぬ。然るにそれが詰り段々道教となつて來ましたのは、昔からあります所の是等の藝文志に書いてあります學問的思想、特に醫者の術とか或は神仙の術とかいふものが聯合してさうして老子の書物を附會して道教といふものが出て來た、要するに道教といふものは支那の古代宗教的思想が結晶してあゝいふ一つものを生じて來たやうに考へます、此故に藝文志を見ましても、まだあの當時に於ては神仙家といふ者と道家といふ者は別でありました、道家は道家で別に綱目を立て、神仙家は神仙家で別に綱目を立て決して神仙家即ち道家とは認めて居りませぬ。學問の違つたものとして取り扱ふて居るのです。そこで道家に於て最も長生不死といふやうな事を後に重んじましたが、其起源は醫者及び神仙家の方にあります。

此神仙家なる者が一體どうして支那に起つて來たか、それは十分には私にも分りませぬが、兎に角神仙の術といふものが昔からあつたやうに考へる。で神仙の術の書物に見えて居るのは、即長生不死の人が居ることが見えて居るのは列子が最も古いのであります、列子には五所の山を出して居ります。列子に次いで東方朔といふ人の著はしたと傳へられて居る十州記、それから其他王嘉の拾遺記などにも見えて居ります。


以上諸種の書物に記載せられたる名稱に至りては、往々異なる者があつて必ずしも同一でありませぬ

が其中後世まで古く傳説として遺つて居るのは三つあります。三神山と申します、其外二つありますが之は略しまして此三つが一番後世まで著るしくしれわたつて居ります。

瀛州

三神山方丈

蓬萊山

此列子などに依つて見ますと、此三神山は皆非常に立派な山であつて其處の宮殿樓閣などは金銀を鏤めてある。其處に生じてゐる所の草木の實などは之を喰べるといふと、もう死なないといふ事を言觸れて居る。それからして此の三つの山は浮島のやうなものであつて、ふらく動いて歩く島であるというやうな事を述べてあります。それから尙ほ外に拾遺記といふ本に此の三つの島を三壺と稱するとある。どういふ譯で三壺と稱するかといふと、此三つの山は形が壺のやうである、上が廣くて中が狭くてさうして  斯ういふやうな形である。即ちこれによりますると佛教の所謂須彌山の形に似て居るやうであります。そこで段々今日から三神山といふものに付いて、どういふ譯で斯んなやうな考が浮んだものであるかといふことを考へて見ますると、史記の封禪書其他に依ると、是は疑もなく盛氣樓を支那人が見てさうして仙人の山であるといふ説を考へたのではないかと思はれます。それは何故かといふと、今言ふ通り列子などに依つて見ましても、是等の山といふものは一定して居らぬ、始終ふわ／＼して動いて來

るものであるとありますし、それからして更に史記の封禪書などを見ましても、秦の始皇帝が使を三つの山に長生不死の薬を求めに行つた所が、なか／＼行くことが出来ない、其處に到着したかと思ふと忽ち其の山は何處かに行つてしまつて無いといふ事が述べてある。さうして何處に三神山といふものがあるかといふと、所謂勃海にある勃海といふのは今日の勃海で山東省の海です、あそこに浮んで居ると斯ういふ事があります。さうして見たならば或は事に依つたら蜃氣樓といふものが見えて、それを其當時の人が信じて其處に仙人が居るといふやうな事を言出して、段々さうであつたかといふやうな事になつたのではないかと考へる、蘇東坡の詩の中にも山東省地方で蜃氣樓を見たといふことが見えて居ります。尙ほ三神山の名稱、蓬萊山それから方丈瀛州といふ三つに付いて考へて見ますと、あとの二つは旨く解釋が出来ませぬが、蓬萊山は清朝の畢沅といふ學者が山海經の註釋をしたのに、蓬萊山といふのは詰り浮來山或は邳來山といふ山の轉音である。といふことを述べて居ります。尤も畢沅は之を實際の山として其の所在の地理を明確に述べて居りますが、寧ろ私共の考に依ると、今の史記の封禪書列子などに依つて論じて見ますといふと、海中にふわ／＼して動いて來て一定して居らぬといふ點で、始め浮來山といふ名であつて、それが後に蓬萊山といふ名を附けたのではないかといふやうな風にも考へられます。尙ほ此三神山に付いては我國の平田篤胤翁は三神山餘攷といふ書物を書きまして、要するに三神山といふものは日本の方の事を臚氣に言つたものであるといふことを説いて居りますし、又彼の歐羅

巴ではラクベリーといふ人が是は南洋諸島の傳説が段々支那に來たものであるといふことを述べて居ります、又最近に於きましてはシュレーゲルといふ人が佛蘭西から出ます通報トウボウといふ雜誌に三神山の事を述べて居ります。そこで私共の考ではそれは、平田翁の言はれるが如く我國を指したる者でもなく、又ラ氏のいふ如く南洋諸島からの傳説ではない。要するに支那古代からある所の傳説であるといふことが一番善い説かと思はれます。兎に角三神山といふものがあつて秦の始皇帝なりが之を非常に信じた。次いで漢の武帝も此長生不死の藥を求め、或はそれが爲めに多大の費用を抛ち時間を費したといふことは今更申すまでもなく歴史に於て明かな事であります。

さういふ譯であつて非常に神仙の術といふものが勢力を占めた、陰陽五行の説といふものが盛になつて來た、隨て儒者などに於ても矢張り神仙の術を研究したり陰陽五行の説を研究した人が多少あります例へば彼の秦の始皇帝の爲めに藥を求めに行つた盧生といふ人間がある。あれは當時の儒者であります漢の始めに於て張蒼といふ有名な學者は左傳に通じた學者でありますが、矢張り陰陽家である。それから又淮南王劉安の如き人は皇族であつて矢張り神仙の術を研究した、其書物なども今日は淮南子の外、他に特に神仙の術に關係した者もあつたらしく其傳記に見えます。さういふ風であつて神仙術などいふものは大變盛であつた、老子其人の道は彼の漢の武帝からして以後諸子百家を退けた爲に廣がりませなかつたけれども、併ながら暗々の裏に老子の道は社會に勢力を有つて居つたのであります。例へば彼

のヨーオンンといふ人があります。是は別に老子の道ではありませぬが、其人の行ひは餘ほど老莊のやうな風を帯びて居る、被の揚雄の太玄の如きは老子から來た文字であります。だから老子の道は暗々裏に社會に行はれて居つたのであらうと思はれる。斯の如く一方に於て昔からあつた所の神仙の術であるとか其他陰陽五行の説は漢代に非常に盛に行はれて、それから一方に於ては老子の道も多少は行はれて居つたけれども、まだ老子の道と支那古代の宗教思想と結び附いて道教などといふ宗教思想は成立つて居らない。それがどうして道教などといふ宗教になつたかといふと、是は疑もなく佛教の支那に這入つて來たのに歸著するのであらうと思ひます。

佛教は後漢の明帝の時代に這入つて來たといふことが一般の通説になつて居りますが、當時佛教家と道教家が争つたといふことが彼の漢法内本傳といふ書物に出て居りますが、あの本は多少疑はしい本でありますから、彼の書物に傳へられた如く當時佛教と道教とが争つたといふ譯ではありませんまいが、兎も角段々漢代に這入つて後漢のあたりから佛教と道教は軋轢を生じて來たといふとは事實のやうに考へる、書物なども道教に關係する書物も既に後漢の末にはあつたことは後漢書の襄楷傳の注に見えて居ります。それから老子を神として祭つたといふことも矢張り後漢の時代であります。段々老子が一つの宗教的の偶像、崇拜物と認められて隨つて自然々々に道教などといふものが其處から起つて來たのであります。而して道教に於て直接今日まで道教の太祖とも見做されるのは後漢の末に起つた張道陵といふ者

であります。張道陵或は道の字を取つて單に張陵とも書いてあります。是が道教を起した始めと言つても宜くはあるまいかと思ひます。此人の傳記などは神仙傳、列仙傳などに澤山見えて居ります。彼の後漢の末に黃巾の賊の張角といふのは張道陵の一派と思はれます、隨分張道陵の一族には謀叛を起した人間も居る、それからして此道教を較、學問的に組織立てたのは即ち西晋の葛洪でありまして、抱朴子及び神仙傳などを著はして居ります。段々道教を學問的に見るやうになつて參りました、次いで南北朝時代に於ては寇謙之、是は道教の大家でありますが、斯ういふ人が出て來た。道教の盛になつたのは佛教の力であるといふより外ない、道教家は佛教に對抗する爲に道教を宗教的に組織したのであります。尙ほ是等の事に付きましては近頃東亞協會から出ました學術雜誌があります、あれに妻木直良といふ方が是等の道教と佛教の間に軋轢に付いての精しい話であるとか其他の事に付いて書いてありますから別に私が今茲に申上げる程のこともないのであります。

偕、そこで道教の種々の變遷に付いて極簡單に申上げますと、道教は其始めは神仙術であります。其神仙術が一變しまして、長生不死の藥を飲むといふやうなことになつて參りました。それが今度一變しまして呪禁を主とするといふことになつて來た。其後に呪禁をするのが一變しましてお經を讀むことになつて來た。さういふ風に段々道教といふものが變つて來て居る。それから道教の中にも種々派があります、南宗、北宗など、言つて南の派、北の派といふものがありますが、最も道教の中に勢力のあるの

は天師道といふ教であります。此天師道といふのは張道陵の語り分れたものでありまして、是が一番勢力があるといふことであります。張天師といふ號を賜はつた、水滸傳を見ますと、始まりに張天師が疫癘を掃ふたといふことがありますが、即ち張道陵の派であります。

そこで道教の大體の事は終りましたが、道教の聊か神學といふか、まあそれ程大袈裟なものではありませんが、さういふ事に付いてちよつと御話しますと、道教では語り佛教の三位一體に準らへまして三清といふことを申します。三清といふのはどういふことかといふと

玉清宮……天寶君

三 清 紫微宮……靈寶君

太極宮……神寶君

仙人の御殿であります、玉清宮には天寶君が居る。紫微宮には靈寶君が居る、太極宮には神寶君が居る。是は天上世界にあるのであります。是は佛教の語り三位一體に準らへて作つたものと見えます。其外元始天尊或は玉皇上帝、種々の名を設けてあります、さうして其經文はどうでありますかといふと、是等の神様の天啓（レヴェレーション）に依つて經文は出來た。十二部に道教の經文は分れて居る。即ち道藏といふものを道教家は有つて居ります。そこで隨つて道教に關係した本は非常に澤山餘計ありますし、又道教家は多少でも道教に關係したものは大抵道教の中に網羅して居ります。諸子類なども隨

分道教の中に這入つて居るものが澤山あります。それ等の多數の本を分類して見ますといふと、斯ういふ風に區別が出来ます。第一は哲學に關係したものの、所謂宇宙の起原などいふことを論じたもの、多く是は荒唐不稽なものであります、それから第二は呪禁に關係した經文、方術に關係した經文、それから第三は仙人の傳記に關係した經文、それから第四は醫術に關係した經文、此醫術といふものを道教で如何に見て居りますかといふと、大略四つに之を分類することが出来る。其四つの一つは避穀、穀物を喰べないといふこと、第二が服藥、藥を飲むこと、其藥が二品ありまして、一品は植物性の藥、今一つは礦物性の藥であります、植物性の藥よりも礦物性の藥の方が、之を飲むと人間が長生をするといふことを言傳へて居る。それから第三は調息と申しまして、所謂息をすること、深呼吸といふ類であります。胎息經などいふ本があります。それから最後が房中術といふものであります。是は文字の示す通りさういふ事を書いたものと思はれる。斯ういふ風に醫學を、醫學といふとおかしうございますが、醫術を見て居るやうに考へる。

そこで今日は道教の神といふやうなものを祭つてあるかと申しますと、支那に於ては専ら道教に依つて下流社會の道徳は維持せられて居りますから、隨つて道教の神といふものはなかく澤山あります。道教では昔からの神様を皆道教化してしまふ。それから又道教が新しく自分で設けた神もあります。それ等の神の事は封神演義といふ書物と集説詮真といふ書物の兩方に出て居ります、封神演

義といふ書物は私共見ませぬから、どんな本か分りませぬが、兎に角神の名が出て居ります。集説詮眞といふのは耶蘇教の立場から支那の道教を書いたものであります。今晚一冊持つて来て居ります、神の事が書いてある。それに依つて見ると三官といふものがある。三官は天地と水を祭る、是は張道陵の派の張衡といふ者が始めたものであります。それから東嶽廟といふのがあります、支那の泰山の神を祭つたものであります。それから財神、支那人は金を儲けることを好みますから是は福の神様、文昌帝君、是は詰り學問の神様といふやうな風にして居る。それから竈神、竈の神様、それから關羽即ち關帝などは道教が自分の方に引張つて來た神様であります。其外隨分あるさうであります。併ながら道教家は皆是等の神様の姓名を附けてやる、其處が又妙であります。無論關羽の如き人は實際居つた人でありますけれども、其外三官を始めとして東嶽廟、財神、文昌帝君、竈神といふやうなものに對して盡く實在したる人のやうに苗字名前を附けてあります。此財神などは三國志を讀むと趙雲といふ人がある。その従弟であると述べて居る、東嶽廟といふのは圓常龍といふ名の人である。といふやうな風に皆何處までも人間同様に認めて居ります。それ等の事は尙ほ精しく御話すると長くなりますから大略にして置きます。

尙ほ此前に道教の經典の事を話しましたが、言落しましたから一言加へて置きますが、道教の經典は種々ありますけれども、大部の經典で支那の下流社會の人が皆讀む譯には行きませぬし、一般普通行は

れて居るのが陰陽門と太上感應經といふのが行はれて居ります。此二つの書物は儒教と佛教と道教と三つの教から混同して出来て居るものでありまして、無論書いてある事は何も無いことは書いてない。道徳を奨励することと結構な事でありませけれども、極めて淺薄なものでありまして、下流社會の道徳の教としては宜いといふ位の事であります。

そこで最後に臨みまして道教の性質を一言述べますれば、道教は詰り支那古來の迷信の掃溜である。種々の迷信が寄つて道教が出来て居るものである。それから第二には道教は詰り現在の宗教であつて現實の利益、幸福といふことを主眼とした教であつて、高尚なる宗教的觀念を有つて居るとか、深い所の道徳上の基礎を有つて居る教ではないと、いふより外にあるまいと思ひます。

甚だ私の話は亂雜でありまして、一向はや御分り悪い事でありませうが、急いで來ましたから用意もございませなんだ、是だけにして置きます。(拍手喝采)

みよしのは櫻の外に峰もよし

花やつもりて山となりけん